



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.120
2013.9.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

阿玉台式土器 - 東関東に花開いた特異な中期縄文土器 - 塚本師也

第9回 阿玉台式土器の細分(3)

〈阿玉台Ⅱ式土器〉

隆帯に沿って複列の角押文を施す土器が、第Ⅱ類、即ち阿玉台Ⅱ式土器である。半截竹管の内側や2本の棒を束ねた工具、あるいは櫛歯状工具(第5図4・5)を用いて、押し引きしたり、線を引いたりする。木之内明神貝塚Aトレンチなどで、Ib式を主体とする層より上層において、出土数を増したことにより設定されたが、層位的には明確に区分されてはいない。西村は向油田貝塚の土器を中心に、その内容を把握したようである。阿玉台Ib式新段階に、単列の角押文を複数条併走させるものがあるが、工具を変えて表現するようになったものと思われる。

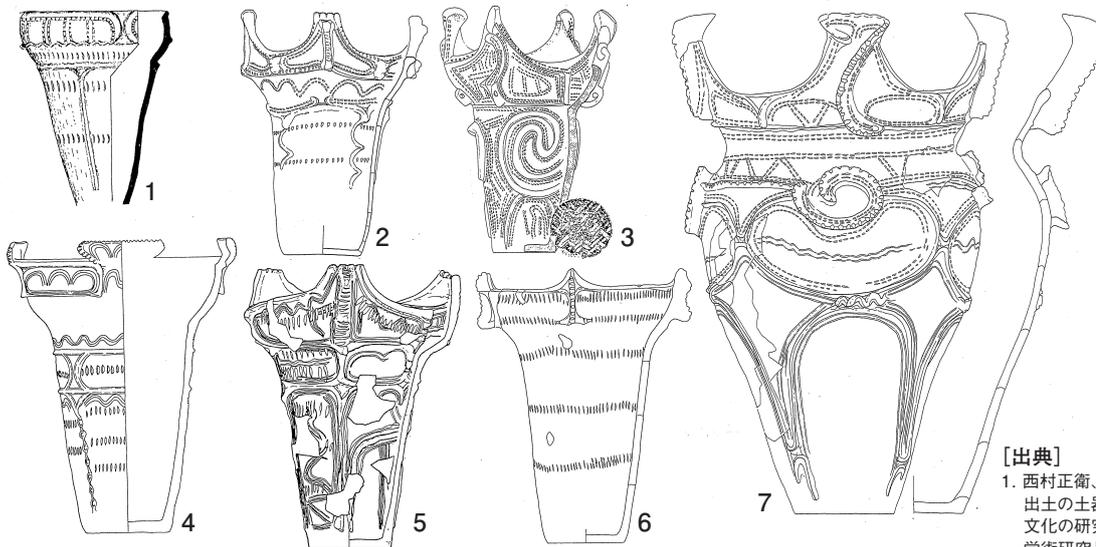
筆者は、阿玉台Ⅱ式は、施文具が置換されるが、阿玉台Ib式の文様をほぼ踏襲したと考える。扇状把手を持つ平口縁の土器(第5図

4)、波頂部の皿状突起から渦巻き状の隆帯を垂下させる土器(第5図7)、弧状に屈曲する体部懸垂文(第5図2)、頸部への施文(第5図2・4・7)、V字状や魚鱗状の突起(第5図6)が同様にみられる。これらは、以後のⅢ式以降にはほとんど引き継がれない。体部のヒダ状圧痕や刻み目文もみられる。ヒダ状圧痕から刻み目文が派生したと考えられるが、量比を変えながらIb式からⅡ式まで並存し(高山1997)、Ⅲ式に一部が爪形文に置換されて消滅する。これらの文様は、元来輪積み痕下端に付けられたものである。東関東地方は前期の浮島式以降、型式(タイプ)を変えながら輪積み痕を残す伝統があるが、刻み目文を最後にその伝統は終焉を迎える。

筆者は、阿玉台Ib式とⅡ式を阿玉台式の前半、Ⅲ式以降を後半と考える。阿玉台Ⅱ式

とⅢ式が共伴する事例が多い。単独で出土する阿玉台Ⅱ式とⅢ式と共伴する阿玉台Ⅱ式とで、やや違いがある。後者の多くに、勝坂式の要素を取り入れた種々の変化がみられる。阿玉台Ⅱ式のみで構成される段階、阿玉台Ⅱ式とⅢ式が共存する段階、阿玉台Ⅲ式のみで構成される段階の3段階の変遷があり、阿玉台Ⅱ式とⅢ式の共存段階に文様の変化が始まる。筆者がⅢ式を変化の画期ととらえる所以である。なお大村裕は、阿玉台Ⅱ式を2細分し、阿玉台Ib式の伝統が残るのは阿玉台式Ⅱ類の古い部分ととらえている(大村1991)。

阿玉台Ⅱ式のみで構成される資料として、栃木県石神遺跡I区2号住居跡、茨城県境松遺跡51号住居跡、群馬県房谷戸遺跡21号住居址出土土器等をあげることができる。



第5図 阿玉台Ⅱ式土器

1. 千葉県向油田貝塚
2. 千葉県子と清水貝塚
3. 福島県大畑貝塚
4. 茨城県陸平貝塚
5. 千葉県蘇立遺跡
6. 群馬県三原田遺跡
7. 群馬県房谷戸遺跡

縮尺: 1/10

〔出典〕

1. 西村正衛、1971、「千葉県香取郡向油田貝塚出土の土器—東部関東における縄文中・後期文化の研究—その四」『早稲田大学教育学部学術研究』第21号
2. 松戸市教育委員会、1978、「子と清水貝塚 遺物図版編1」
3. いわき市教育委員会、1975、「大畑貝塚調査報告」
4. 庄司克、1981、「茨城県陸平貝塚発見の縄文土器」『貝塚博物館紀要』第6号
5. 遺跡研究会、1982、「遺跡研究論集Ⅱ」
6. 群馬県企業局、1990、「三原田遺跡」第2巻
7. 群馬県教育委員会、1989、「房谷戸遺跡Ⅰ」

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

〔参考文献〕

- 大村裕、1991、「型式細分の方法に関する一つの試み—埼玉県飯能市・堂前遺跡第2次調査1号住居址出土土器の分析を中心に—」『下総考古学』12、下総考古学研究会
- 高山茂明、1997、「阿玉台式土器における文様要素の変異」『笠間市西田遺跡の研究』笠間市西田遺跡調査団
- 西村正衛、1971、「千葉県香取郡向油田貝塚出土の土器—東部関東における縄文中・後期文化の研究—その四」『早稲田大学教育学部学術研究』第21号
- 西村正衛、1972、「阿玉台式土器編年的研究の概要—利根川下流域を中心として—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第18輯、早稲田大学大学院文学研究科

目次

■阿玉台式土器	阿玉台式土器の細分(3)	塚本師也 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイバレット・サイト(第113回)	井澤 純 …3
■考古学の履歴書	良き師・良き友に恵まれて(第11回)	渡辺 誠 …2	■考古学者の書棚	「北極にマンモスを追う」	栗原伸好 …4

考古学の履歴書

良き師・良き友に恵まれて(第11回)

渡辺 誠

12. 平安博物館への奉職

前回までに記したように、大学院時代の生活は、概して充実していたというべきであったかもしれない。しかし博士課程を修了しても、その後の展望はまったく開けていなかった。結婚する相手ができて就職の当てもなく、生活の目途もたっていない。真剣に就職先を探した。幸い九州の某県の教育委員会に決まりかけていたが近く古代学協会の角田文衛先生が上京されるが、君に関係することなので、返事を少し延期するようにと、江坂輝弥先生の御指示があった。そして、角田先生の主宰する古代学協会が、京都市内に平安博物館を設立するのであるが、この新しい研究機関にあって大いに業績を上げ、名声を上げてくれる若くて活きのいい研究者が欲しいということであった。今になるとなぜ私を名指しにされたのか知る由もない。ただ当時同志社大学の大学院にいて、角田先生に深く傾倒し、角田教信者とよばれていた石附喜三男氏の強い進言があったと思われるが、故人に確かめようがない。1967年初夏のことである。

私は翌年の3月に博士課程を修了するのであるが、平安博物館の開館予定はその5月であり、それでは展示計画に間に合わないため、急遽8月に着任することに決まった。そして成城大学で山内清男先生の助手をしていた磯崎正彦氏と一緒に、8月1日に京都に向かった。そして目茶苦茶に蒸し暑い京都の夏の洗礼を受け、これからの暮らしを考えると気の遠くなることであった。そして新居となるアパートも捜さなければならぬ。この時真摯に心配してくれて、あちこちの不動産屋をまわってくれたのが鮎沢(現朧谷)寿氏である。私は考古一課、彼は文献課に所属していたが、同じ年であり、祇園の夜の飲み歩きでは名コンビと言われたりして、祇園町の畑中伸夫氏とともに、その交流は今でも続いている。東京では公私とも逼塞状態であった私にとっては、心いやされる思いであった。

磯崎課長の下に、同僚の片岡 肇・中谷雅治氏がいたが、このメンバーによる考古一課の最初の発掘は、1967年8月の大分県丹生遺跡の発掘であった。1968年8・9月には山陽新幹線建設に伴う兵庫県常全遺跡の発掘も行った。また平安京担当の考古二課の手伝いで、1968年には京都市太秦広隆寺遺跡、1972年には平安宮内膳司跡などの発掘にも参加したが、名古屋転出の直前に考古学第2研究室の責任者として発掘した平安京土御門内裏跡は、いろいろな意味で私には記念碑的な遺跡であった。参加者には考古学第2研究室のメンバーに加わった南 博史氏、平安京調査本部の松井忠春・佐々木英夫氏、文献学研究室の藤本英一氏等が、報告書の作成まで協力して下さった。またいろいろな場合を想定し、多くの先生方に指導委員になって頂いたが、博物館の事務局から名古屋大学考古学研究室に移った小沢一弘氏との関係

で、陶磁器の榑崎彰一先生に加わって頂いた。後に同先生のもとに助教授として呼んでいただけたとは、まったく思いがけないことであった。

そして考古学第1研究室の本来的業務である、丹生遺跡を含めた旧石器時代の研究であり熱心ではなかった私を、もっと働かせるべく1971年に第1研究室から縄文研究のための第2研究室が分離されることになった。私にとってはさらに嬉しいことが待っていた。『日本文化の源流』として、高梨学術奨励基金などの援助も受けることができた。このために選ばれたのが、青森県田子町石亀遺跡(縄文晩期)、京都府舞鶴市桑飼下遺跡(縄文後期)、大分県大野町宮地前遺跡(縄文晩期)の3遺跡である。

このうち桑飼下遺跡のみは舞鶴市からの委託調査であるが、他の2遺跡は、江坂輝弥先生、賀川光夫先生のご尽力のお陰である。

しかしこれらについて記す前に、私の近畿における縄文研究に御配慮を頂いた諸先生方について記し、感謝の気持ちを表しておきたい。まづ第一は、江坂先生の親友であった京都教育大学学長の小江慶雄先生である。先生には琵琶湖の湖底遺跡をはじめ主要な遺跡を詳しく教えて頂き、任意出勤の特権を活用して万遍無く見て歩くことができたのである。特に中部以南に多い切目石錘を、関東の土器片錘との関係もあり、実測し、重量を測定して回った。そのうち特に滋賀県では水野正好先生の御教示がありがたかった。また大阪府に移られてから、藤井寺市国府遺跡の発掘にも参加させて頂いた。

またしばしば訪ねてこられた舞鶴市の杉本嘉美氏からは、由良川流域の遺跡や遺物を教えて頂き、東日本とは異なり、低地の自然堤防の遺跡に注意していくようになった。この杉本氏によって、桑飼下遺跡が削られていることを知らされ、舞鶴市教育委員会と相談の上、平安博物館で調査することになった。一部に特殊泥炭層があり、植物食の研究が大幅に躍進することになった。この特殊泥炭層を踏み荒らして打製石斧を約40点採集してから教育委員会に届けた進歩的と称する学生達があったが、そのことが遺跡破壊に等しいという自覚はなく、近畿縄文の研究はさらに発展させる必要性を痛感させられたのである。この桑飼下遺跡と重要性については、次回でさらに詳しく記してみたい。

略歴

昭和13年11月18日 福島県平市大町(現いわき市)に生まれる
 昭和32年3月 福島県立磐城高校卒業
 昭和33年4月 慶應義塾大学文学部入学
 昭和43年3月 同上大学院博士課程修了
 昭和43年4月 古代学協会平安博物館勤務
 昭和54年8月 名古屋大学文学部助教授
 平成元年4月 同上教授
 平成14年3月 同上定年退職、同上名誉教授
 平成15年4月 山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)
 平成18年7月 日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

隔月連載です。次回は石井則孝先生です。

レエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 113

青野原バイパス関連遺跡 ～ 神奈川県相模原市

井澤 純

神奈川県北西部、丹沢山地北部の山峡を南西から北東へ向かって流れる道志川の右岸に広がる河岸段丘上に位置する遺跡が、今回紹介する青野原バイパス関連遺跡です。私が県の埋蔵文化財専門職員として採用されて最初に発掘調査を担当した遺跡です。

この青野原バイパス関連遺跡は、相模原市緑区青野原（旧津久井郡津久井町大字青野原。2007年3月に相模原市と合併）に所在し、道志川に沿って段丘上を相模原市緑区西橋本から富士五湖方面に抜ける国道413号線のバイパス建設工事（通称「青野原バイパス」）に伴って1992（平成3）年4月から約2年半に渡って発掘調査が行われました。

バイパス工事は、河岸段丘を開析する複数の谷や沢を避けながら山裾に大きく蛇行する旧道の北側に、谷や沢によって分断された段丘平坦地5箇所を橋でつなぎ、緩やかな曲線の線形をもつ道路を建設しようというものでした。遺跡は道路予定地5箇所すべてで確認され（東から大地遺跡、長谷原遺跡、明日庭遺跡、大地開戸遺跡、梶ヶ原遺跡）、その総称が青野原バイパス関連遺跡です。調査面積は合計10,754㎡、段丘の標高は約315m～280m、道志川との比高差は約30mあります。

調査では、縄文時代早期後葉の炉穴群、貯蔵穴群、縄文時代中期前～末葉の集落跡、古代の円形土坑群、中近世の掘立柱建物跡や墓坑等が確認され、調査区が道路幅のため断片的ではありますが、調査例が極めて少なかったこの地域の様相が明らかになりました。

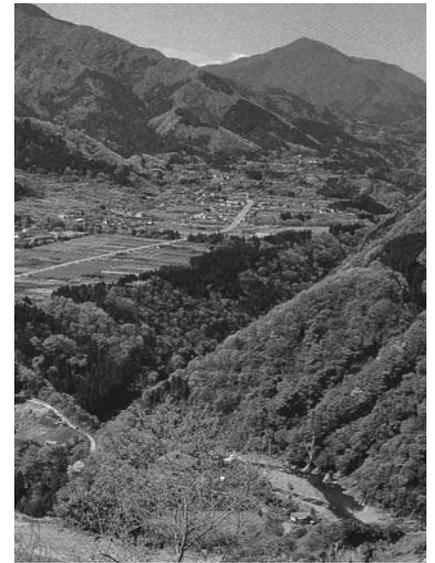
特に縄文時代中期の集落跡が見つかった大地開戸遺跡は、遺構数、遺物量ともに他の4遺跡を圧倒的しており、当該期の遺構は、竪穴住居跡33軒、柄鏡形住居跡3軒、掘立柱建物跡1棟、配石遺構群等が検出しました。中でも中期後葉（曾利Ⅲ式期）の石壇・石柱を有する住居跡は、後続する中期末葉から後期にかけて盛行した敷石住居跡との系譜を辿る上で注目されました。近年、隣接地で店舗建設に伴う発掘調査が行われており、今後、集落の様相が更に明らかになっていくこ



▲石壇・石柱をもつ竪穴住居跡（神奈川県教育委員会提供）

とが期待されます。

遺物についても興味深い資料が多く見つかっています。一例を挙げると中期中葉の深鉢形土器の胴部下半を転用した容器で、転用後の口唇部には赤色顔料（ベンガラ）を含んだ漆が付着し、底の内部にも漆が残っていたものが遺構外から出土しました。クロメ漆の容器と考えら



▲青野原遠景（神奈川県教育委員会提供）

れ、この集落で漆を使った土器の赤彩が行われた可能性を示すものとして、この山間地集落の営みを考える上で重要な資料といえます。

このように、この遺跡は私にとって初めて調査を担当した遺跡であり、遺跡自体も興味深いものでしたが、それ以上に思い出深いものになっているのは、発掘から出土品等整理が終わるまでの約4年間、継続的に調査に参加し、支えてくれた10名ほどの調査補助員さんの存在でした。

実のところこの発掘調査は、出土品等整理も含め、期間的に厳しく、調査はいつも押していました。

このような状況下で、山間地のため夕方早く暗くなってしまう中、ライトを照らして遺構実測等の作業を手伝ってくれたことや、調査が忙しいさなか、地元で催した遺跡展の準備の際には、1日の発掘作業が終わった後に居残って展示用の遺構模型の制作や展示解説の作成等に協力してくれたこと等、今となっては大変申し訳ないと思うのですが、彼らには大いに助けられたことを思い出します。

また、休日には山頂付近の水場で勝坂式土器を2個体が出土したとされている^(※1)青野原の南側に連なる山並みのひとつ、黍殻山（標高1272.8m）へ、その場所を確認すべく登山に出かけたり（結局、土器は見つかりませんでした）、近隣の遺跡を見学に行ったりと、調査以外の付き合いも多く、今までも楽しい記憶として心に残っています。

以上、後段は単なる思い出話になってしまいましたが、調査から20年余りが経過し、道志川流域の調査例も増える中、今後の山梨県域と神奈川県域を結ぶこの地域の研究に、本遺跡の調査成果が少しでもお役に立てれば幸いです。

※1 1989岡本孝之「山の上の縄文人」『考古学の世界』慶応大学民族考古学研究室編

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは永井宏幸さんです。

考古学者の書棚

「北極にマンモスを追う 先端科学でよみがえる古代の巨獣」

鈴木直樹／角川文庫 (2012)

栗原 伸好

本書は、2007年同社刊行の『マンモスを科学する』を改題の上、一部加筆修正し文庫化したものである。現在、パシフィコ横浜で開催されている「特別展 マンモス YUKA シベリアの永久凍土から現れた少女マンモス」を見学した際、会場でふと購入した(会期：7月13日～9月16日)。

旧石器時代の研究を嚙っている者としては、やはりこの「マンモス」という言葉にはひかれるものがあり、パンフレットと共に本書にもつい手が伸びてしまった。

本書を読み始めると、著者の発想・行動力の強さに引き込まれる。書名からこの分野の研究には、他分野の研究成果も入ってくることは当然予想されたが、鈴木氏自身が医学・工学・理学博士であり、医学領域では医用生体工学・医用画像工学、理学領域では生物学・古生物学が専門という。これらの知識を総動員し、これまで氏が体験・牽引してきた貴重なマンモス研究とその視点・方法を平易に、且つ大胆に下記の様な構成で紹介している。

はじめに

第1章 いにしえの巨獣、マンモスの謎

第2章 北の大地での出会い

第3章 冷凍マンモス発掘プロジェクト

第4章 「ユカギルマンモス」に会いに行く

第5章 マンモスを日本に輸送する

第6章 マンモスの体内へ

終章 タイムトラベルの夢は続く

あとがき

あとがきのそれから

永久凍土から発見されるマンモスは、死後数万年経っていても、状態によっては、皮膚や体毛のみでなく、筋肉や内臓等の軟組織もほぼ当時のまま残していることすらあり、これを研究するということは、「タイムマシンに乗ってはるか太古の昔に行き、そこに生息していた生物にじかに触れて調べるようなものだ。科学者にとって夢のような体験なのである。」とその研究動機を説明する。

ともすれば、日々の生活の中で我々が忘れがちな、この純粋でわくわくする研究動機を一途に掘り下げることと全力で取り組む姿勢が読者の関心を強く引く。上司の反対を押し切

り、単身、崩壊寸前のソビエト連邦のレニングラードにある動物学研究所に乗り込み、そこでの研究の開始を勝ち取る。以後、氏のあらゆる専門分野を駆使し、2005年に開催された「愛・地球博」でのプロジェクトでマンモス研究の1つの大きな成果を達成する。

氏は、このプロジェクトを受ける条件として3つの条件を提示する。そのうち、本プロジェクトが単なる冷凍マンモスの展示に留まらず、きちんとした発掘・研究活動がこれに伴うこと、展示場所自体が研究機関としての機能を持つようにすることという2つの重要な研究視点が受け入れられ、プロジェクトがスタートする。

急な予算減に見舞われる中、氏を中心にしたこのプロジェクトは、永久凍土の掘削・資料の運搬・各種機材の開発等、あらゆる分野のスペシャリスト達の協力を得て、「ユカギルマンモス」の体内分析を実施することにより、マンモス研究に多大な功績をもたらす。

最後に氏は、このプロジェクトを通じ、「ユカギルマンモス」は、単なるマンモス研究における成果のみではなく、人間が「自分たちで引き起こした複雑な環境変化の連鎖反応を、我々自身が冷静に見つめ、その結果を予知して自分たちの生き方を修正し、未来の正常な地球を取り戻すべきであるということ」、仲間大切さ・素晴らしさを語っている。そして、冒険的要素を多分に含むこの様な研究の最も大切なことは、何をおいても参加者一人ひとりの「命」であるという趣旨の一文で締めくくっている。

僅か16年の間に阪神淡路大震災・東日本大震災という2つの大きな悲しみを経験した我々にとって、あらためて「一番大切なものとは何か・・・」そんなメッセージもどこかで問われている様な、氏の「研究者」と「人間」としての熱い思いを感じられる素敵な1冊です。



アルカ通信 No.120

発行日 2013年9月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp